11
914
A 900
8

大正十一年四月
大隈文書

第十章　佛國ニ於ケル政策ノ變動（千八百三十四年ヨリ千八百三十九年ニ至ル）

其一　列レーランノ新政策

千八百三十四年四國同盟ノ訂結セラレシヨリ千八百三十九年東歐ノ危憂ヲ生スルニ至レル五年間ハ歐洲ノ外交史ニ於ケル混沌晦朦ノ時期ニシテ一モ顯明ナル事實ノ其ノ間ニ生シタル者アルニアラズ故ニコノ過渡ノ時期ニ際シテ吾ノ講究ニ裨益スベキ者ハ唯ダ諸大國ノ外交政策ガ幾微ノ間ニ漸ク變遷推移シタル次第ヲ考察スルニ在リ今之レ千八百三十年以來北歐ノ連衡ニ對抗シテ能ク歐洲ノ均勢ヲ維

持シタル実ニ英仏二國ノ左盟ニ外ナラス而シテ
千八百三十四年後ハ二國ノ左盟漸ク壞崩シ他
ノ結合新タニ成リテ將ニ之ニ代ラムトスルノ秋ナ
リシナリ
英仏左盟ヲ創立スルニ與カリテ最モ其ノカヲ致
シタル者ハタレーランナリ而モ彼レハ千八百三十
四年ノ末ニ至リテ其ノ左盟ヲ廢棄セムコト
ヲ主張セリ彼レハ其ノ外面ニ於テ務メテ冷膽
ヲ粧ヘリト雖トモ内心甚ダ自負ノ念ニ富メル
ヲ以テ往キニパルメルストンガ四國左盟ノ訂結
ニ関シテ巧ミニ彼レヲ瞞着シ又且ツ自ラ其ノ奇
智ヲ伐リテ輒モスレバ彼レヲ軽侮スルノ狀アル
ヲ視テ其ノ心甚タ平カナル能ハズ既ニシテ千
八百三十四年十一月ニ至リ自由党ノ内閣仆レテ
ピール、ウエルリントンノ二人メルボルン又卿及ヒパル
メルストンニ代レリト雖ドモ新内閣ハタレーラン
ガ嘗テ千八百三十四年ノ政變ニ際シ均シクピ
ール、ウエルリントンノ諸人ヨリ成レル保守党ノ内閣
ヲ顛覆スルニ與カリテ陰カニ其ノ力ヲ致シタル
ヲ含ミテ之ニ其ノ心ヲ許スコトヲ肯ムセズ故ヲ
以テタレーランハ其ノ永ク倫敦ニ留マルノ不可
ナルヲ憂カリ千八百四十五年ノ始メニ至リ竟
ニ其ノ全權大使ノ職ヲ罷メテ仏國ニ帰来セ
リ
タレーラン既ニ其ノ職ヲ罷メテ閑地ニ就ケリト雖
ドモ未タ其ノ志ヲ政治ニ断ツニ至ラス王ルイー

フイリップノ諮問ニ應シテ屢〻其ノ意見ヲ奏
上セリ而シテ彼レハ此ノ時ニ於テ切リニ仏國ノ
政策ヲ一變スルノ須要ナルヲ主張シ以為ラク千
八百三十年ニ於テハ仏國ハ新タニ變乱ノ後ヲ
羨ケテ其ノ勢力微弱ヲ極メ輙モスレハ四隣ノ
劫カスヿトナリシヲ以テ英國ト倶ニ左盟ヲ結ヒ
テ其ノ援ヲ仰ノ外復タ策ノ施スベキ者アラ
サリシナリ然レトモ今ヤ其ノ地盤漸ク固定シ
其ノ勢力亦頗ル強大ナルニ至リタレハ必スシモ
永ク英國ノ鼻息ヲ窺フヲ要セズ況ムヤ英國ノ
我レニ結フハ是レ我ヲ援クルガ為メニアラズ
シテ其ノ実我レノ勢力ヲ猜ミカメテ多ク控
制セムト欲スルガ為メナルヲヤ且ツ仏國ガ大

陸ノ諸強國ト親交ヲ脩ムルハ現政府ノ為メニ就
中須要ク可ラサル者ニシテ凡ソ王家ノ権力ハ
決シテ軍金ノ地盤ノ上ニ樹立スベキ者ニアラ
ズ故ニルイー、フイリップニシテ歐洲列國ノ為メニ
偽王視セラルヽコト勿ラムト欲セハ宜シク正統ノ
王朝ヲ以テ其ノ援トナサヽルベカラズト

其二千八百三十四年ヨリ千八百三十五年
ノ間ニ於ケルルイー、フイリップ及ヒ墺
國政府
仏王ルイー、フイリップハ夙トニタレーラント同一ノ
意見ヲ抱持シタルヲ以テ其ノ説ノ如ハ直チ
ニ王ノ嘉納スル所トナレリ王ハタレーラント均
シク英國トノ左盟ノ自國ニ損スル所多キヲ

悟リ且ツ自己ノ政権カ千八百三十年ノ革命ヨリ出テ、共和政ニモアラズ立君政ニモアラス徒ラニ此ノ二者ノ中間ニ彷徨シテ其ノ基礎甚ダ微弱ナルヲ慮リ而シテ亦意ヲ決シテ民主政ヲ取ルコトヲ欲セサルヲ以テ務メテ専制君主ニ近通シテ之ト伍ヲ為スニ若カストナシ思ヘラク斯ノ如クナルトキハ能ク其ノ額上ニ印シタル革命ノ汚点ヲ除キテ正統ノ君主トナリ以テ其ノ政権ヲ久シキニ保ツコトヲ得ヘシト王ハ夙トニ此ノ事ヲ慮リ議院政ノ慣例ニ違ヒ其ノ内閣大臣ニ秘シテ密カニ大陸諸国ノ政府ト聲息ヲ通シ以テ其ノ歓心ヲ收メムコトヲ計レリ然ルニ是ヨリ先キ佛国内閣ハ数回ノ交迭ノ後チ千八百三十五年三月

ブログリー公ハ新タニ内閣首相ニ任シテ外務大臣ヲ兼攝ス(セシ)カ公ハ憲治派(ドクトリネール)ノ領袖ニシテ国ヨリ神聖同盟ノ前ニ某ノ頭ヲ屈スル者ニアラズルヲ以テ王ハ夙トニ其ノ人トナリヲ喜ハズシテ嘗テ一タビ之ヲ内閣ヲ黜ケタリシモ今ヤ衆望ノ帰スル所再ビ之ニ内閣首相ノ重任ヲ授クルノ已ムコトヲ得ザルニ至リシガ王ハ敢テ新首相ニ信ヲ措クコトナリ却テ諸外国ノ宰相就中墺相メテルニッヒト倶ニ屢々書信ノ往復ヲ為シ其ノ腹心ヲ披キテ問フニ大小ノ国事ヲ以テシ由リテ以テ深ク墺国政府ニ結托セムコトヲ計ルリ是ノ時ニ當リ露帝ハ終始仏国ノ王室ノ一族ニ擁立セラレテ起リタルヲ難シ仏国

人民カ波蘭土ノ叛乱ニ對シテ同情ヲ表スルハ其
ノ責王室ニ在リト為シ肯テ仏王ノ言ヲ信シテ之
ト提携ヲ約スルコトヲ欲セス普王ニ至リテ年老
ヒテ專ラ平和ヲ愛好シ其ノ仏國ヲ忌ムコト露
帝ノ如ク甚タシカラサルヲ以仏王モ亦タ務メ
テ之カ歓心ヲ收ムルコトヲ怠ラスト雖ドモ而モ普
國ハ到底仏國ノ同盟トシテ頼ムニ足ルベキ者ニア
ラス故ニルイー、フイリップノ意ハタレーラント均シク露
普ノ二國ヲ措キテ只管ラ墺國ノ友情ヲ獲ムト欲
スルニ在リ而シテメテルニッチモ亦英仏ノ交情ヲ割
キテ仏國ヲ非革命運動ニ誘引スルノ極メテ自國
ニ益アルヲ慮カリ屢ヽルイ、フイリップニ向フテ一方ニ
ハ其ノ英國政府ノ欺リ所トナルノ不可ナルヲ說キ他

方ニハ徒ラニ乘拱ヲ仰クニ止メズシテ自ラ其
ノ政柄ヲ從攬シ其ノ内閣大臣ヲ使役シカメテ
議院制ノ繫累ヲ除キ嚴ニ法制ヲ設ケテ國
内ノ擾亂ヲ禁靡シ施實ニ小政ノ諸國ト協合シ
テ政治ノ革命ヲ制止スルニ其ノ力ヲ致サムコトヲ
慫慂セリ
ルイ、フイリップハ敢テメテルニッヒノ此ノ勸告ヲ拒作
スルコトナクシテ其ノ言ヲ聴ニ從フベキヲ約シタ
リ是レヨリ先キルイ、フイリップハ其ノ長子オルレ
アン公ノ為メニ墺帝ノ姪マリー、テレーズ大公主ヲ
娶ラムト欲シ屢ヽメテルニッヒニ向フテ公ヲ維納
ニ送ルノ意ヲニ通シタリシカバメテルニッヒハ其ノ
挨ノ主ヲ則致スルノ極メテ容易ナルヲ視テ内心甚

ダ之ヲ喜ブリト雖ドモ而モ其ノ結婚ノ請ニ至リテハ敢テ之ヲ容ルヽコトナク乃チ事ニ托シテ応ルレアン公ガ維納ニ来遊ノ時期ヲ延ハサムト欲シ始メハ墺帝ハ事故ノ為メニ維納ニ留マリテ公ノ来遊ヲ待ツコト能ハスト稱シ次ヒテ帝ハ病ニ罹リテ公ノ来遊ヲ歓迎スルコト能ハスト稱シ既ニシテ帝ノ遂ニ崩殂シタルカ為メ(千八百三十五年三月)喪中ニ於テハ大禮ヲ擧クベカラスト稱シ此ノ如クシテ遂ニ仏王ヲシテ其ノ結婚ヲ断念セシメムコトヲ計レリ然レ𪜈王ノ堅忍ナル久シキニ亘リ敢テ其ノ意思ヲ飜ヘスコトアラザリキ

ルイ、フイリップ ハ墺國政府ガ容易ク其ノ請ヲ容レザルハ其ノ未タ君主政ノ旨義ニ忠誠ナラサルヲ疑フノ致ス所ナリト思料シ其ノ決シテ然ラザルノ事実ヲ証明セムト欲シ去年既ニ結社ニ関スル励刺ナル法律ヲ制定セシメ里昂及巴里ニ起リタル共和党ノ叛乱ヲ禁壓センガ今ヤ更ラニ上院ヲシテ去年四月ノ國事犯ヲ裁判セシメテ悉ク之ヲ厳刑ニ處シ次ヒテ七月二十八日フイエシトガ王ヲ暗殺セムトシテ痛リ國人ノ憤怒ヲ惹起シタルニ乗シ其ノ九月新タニ法律ヲ設ケテ大ニ出版ノ自由ヲ挽束シ且ツ從来國事犯ノ被告人ニ附與シタル裁判上ノ保障ヲ剥奪セリ其ノ後チ九月下旬ニ至リ墺國ノ新帝フエルヂナンド一世ガ普王及ヒ露帝ト共ニテプリツツニ會シテ議決セシ所ハ大ニ諸國ノ人民ニ不利ナル所アリシモ

ルイ、フイリップハ又敢テ之ニ對シテ抗議ヲ試ム
ルコトアラザリキ蓋シ露墺普ノ三國ハ當時東
方問題ニ就キテ其ノ意見頗ル相乖離セルニ係
ラス日耳曼聯邦ノ結合ヲ固クシ並ヘ瑞西及ヒ
クラコヴイー共和國ニ迫リテ諸國ノ亡命人ノ國中
ニ潛匿セルヲ追放セシムルノ件ニ就キテハ其ノ意
見一ニ出デ乃チテプリツツノ會議ニ於テ三國君主
ノ間ニ此ノ事ヲ議定シタルナリ將タ此會議ニ
於テルイ、フイリップガ弑殺ニ遭ヒ若クハ其ノ王位
ヲ覆ヘサレタル場合ニハ三國政府ハ前王路易
シヤル、十世ノ継嗣ボルドー公ヲ以テ仏國ノ君主
ト認ムヘキヲ内約シタリ但ダ當時ルイ、フイリッ
プハ果レテコノ内約アリシヲ知リタルヤ否ヤ今

之ヲ詳ニスルコト能ハスト雖ドモ要スルニテプリツツノ
會議ハ佛國首相ブログリー公ヲシテ大ニ不快ノ念
ヲ生セシメタルニ拘ハラズルイ、フイリップハ敢テ之
レガ為メニ其ノ墺國政府ニ好意ヲ表スルノ念ヲ
断ツコトアラザリキ

其三　パルメルストーンノ排仏政策

ルイ、フイリップガ大陸諸國ニ親近スルニ從フテ英
國ハ漸ク之ニヨリ遠カリキダ之ニ對シテ明カニ同
盟ノ約ヲ絶ツニ至ラザルモ事ゴトニ仏國ノ為ス
所ヲ掣肘シテ其ノ政策ニ妨害ヲ加ヘムト欲
スルノ状アリ既ニシテ千八百三十五年四月ニ
至リ保守党ハ政府ヲ退キテ自由党再ビ之
ニ代リタレハ宜シク昔日ノ自由党内閣ノ如ク

仏國政府ニ對シテ最モ好意ヲ表スヘキ者ニ
似タリト雖ドモ其ノ実ハ全ク之ニ反シテ却テ
益〻仏國ヲ疎外セリ且ツ新内閣ハ冷血ニシテ
孤疑心深キメルボルンヌ卿ヲ其首相ニ戴ケリ
ト雖トモ其ノ実権ハパルメルストン卿再ビ外
務大臣トナリテ之ヲ掌握シ而シテパルメルス
トンハ人トナリ果敢ニシテ剛狷精
忍ナル愛國心ヲ以テ其ノ政策ヲ定ムルノ標
準トナシ苟モ断シテ之ヲ行フニ當リテハ復
タ其ノ手段ノ如何ヲ顧ミズ彼レカ常ニ仏國
ノ勢力ヲ抑ユルヲ以テ英國ノ政治家ノ随一
ノ要務ナリト確信シタルハ其ノ師カニング
ノ上ニ出デ、其ノ私淑セルピットニ譲ラズ彼

レノ勲業ハ彼レヲ目シテ暴帝憑河ニ過ギ
ズトスルモ其ノ実彼レハ極メテ勇断果敢ナ
ルト同時ニ又大ニ深謀遠慮ニ富ミ彼レノ為
ス所ハ外見甚ダ無謀ナルカ如クシテ其実ハ総
テ深考熟計ノ餘ニ出テタル者ニアラザル
ハナシ從テ彼レノ為ス所ハ大抵其ノ功ヲ奏
セザルハアラザリキパルメルストンハ往キニ西
班牙ノ女王イザベールヲ援クルカ為メニ仏國ト
協同セリト雖モ其ノ目的ハ敢テイザベール
ヲシテ勝ヲ得セシメムト欲スルニアラズシ
テ專ラ西班牙ニ於ケル仏國ノ勢力ヲ控制
スル仕リキ是レ余ガ既ニ前章ニ記述シタル
所ノモノナリ

然ルニ千八百三十五年ノ始メニ方リテイベリヤク
半島ノ内乱ハ益〻其ノ志甚シキヲ加ヘドンカル
リハ陰カニ露墺普ノ三國ニ援ケラレテ其ノ
軍氣大ニ振ヒ今年五月ニ至リテビレネー
山トエブル河トノ間ニ在ル土地ハ殆ント全ク其ノ
兵ノ占領スル所トナレリ西班牙ノ摂政マリー、
クリスチヤンヌハ大ニ之ヲ恐レ仏國ニ向フテ援ヲ
得ムコトヲ要求セリ當時ルイー、フイリップハ人心
差シ西兵ヲ西班牙ニ出ストキハ之レカ為メ懷
國ト隙ヲ開クニ至ラムコトヲ恐レ敢テ其ノ
允ヲ容レス、コトナカラムト欲シタルモ其ノ内閣
大臣ノ自ら所トナリテ勢ヒ之ヲ拒ムコト能ハ
ス四國同盟ノ條約ニ倣キ英國政府ニ向フテ

一軍團ノ兵ヲ西班牙ニ送ラムコトヲ計リタルニ
パルメルストンハ肯テ其ノ提議ニ應セスシテ唯
ダ亜非利加ニ在ル仏國ノ義勇兵ヲマリー、ク
リスチヤンヌノ用ニ供スルコトヲ諾シタルノミ ルイ
ー、フイリップハ華々シク政府ガ其ノ提議ニ應セ
ザルヲ視テ内心却テ之ヲ喜ビタリシモブログ
リー公ヲ首メ其ノ内閣員ハ之ニ勢テ華々シク
政府ガ仏王ノ西班牙ヲ援クルコトヲ欲セザ
ルハ是レ西班牙現内閣ノ首相トレノー公ガ專
ラ其ノ心ヲ仏國ニ寄スルヲ忌ムノ致ス所ナル
ヲ悟リ痛ク其ノ望ミヲ失ヘリ既ニ久シ
カラズシテトレノー内閣ハ英王政府ノ陰謀
ニ由リテ其ノ職ヲ罷メラレ華進党ノ首

領ニシテパルメルストンノ庇護ヲ受ケタルメンヂサバール代リテ内閣首相ニ擬ケラレシカバ此時ヨリシテ英國ノ外交ハマドリッドニ於テ無上ノ勢カヲ占有スルニ至レリ

之ト仝時ニパルメルストンハ亜非利加ニ於ケル仏国ノ経略ノ着ニ其ノ歩ヲ進ムルヲ憂慮シカメテ之ヲ阻碍セントヲ計レリ是ヨリ先キルイー、フリップガ其ノ即位ノ始メニ當リ務メテ英国ノ猜忌ヲ除カムト欲シ前王シャルル十世ノ創始シタルアルゼリー経略ノ事業ヲ中廢シタルハ既ニ前章ニ述シカ如シ故ニ千八百三十年ヨリ千八百三十四年ニ至ルノ間ニ仏兵ハ唯ダボーヌ、オラン、アルゼウ等ノ如キ海岸ノ二三要地ヲ占領シタルノミニシテ敢テ深ク内地ニ進行スルコトナク而シテ内地ニ於テハコンスタンチリヌニアリメントヘアリマスカラーニアブデルカデアリ絶エズ蜂民ヲ煽動シテ仏軍ニ抵抗セシメタリシガ既ニシテ千八百三十四年ニ至リ仏国政府ハ始メテ英国ノ制手肘ヲ免ルヽコトヲ得タリシヲ以テ遂ニアルゼリー全土ヲ征服スルノ意思アルヲ言明セリ然レドモ亜非利加戦争ハ當時仏国政府ニ取リテ至大ノ難事業ニシテ仏軍ハ能ク其ノ全勝ノ功ヲ収ムルニ先チテ失敗蹉跌ヲ変ケシコトニシテ足レリトセズアブデルカデリハ殆ント アルゼリーノ三分一ヲ占有シマロック及ビジブラルタルヲ経テ絶エス英国政府ト聲

息ヲ通シ英国政府ハ密カニ之ニ軍器糧餉ヲ
供給シテ以テ其ノ抗戦ヲ幇助セリサレハ千八百
三十五年六月アフデルカデーガ仏将トレゼルトマクタ
ー河濱ニ戦フテ大ニ之ヲ破レルガ如キ其ノ後チ
六個月ヲ経テ仏軍ノ為メマスカラー及ビトランサヒヲ
陷レラレシモ曾テ其ノ軍氣ヲ沮喪スルコトナ
ク進ミテ海辺ニ出テ、仏将ダルランビユヲ包囲シ
タルカ如キ是レ皆陰カニ英国ノ援助ヲ得タ
ルニ由ラズンバアラズ

パルメルストンハ啻タニアルゼリーニ於テアブデルカデーノ
抗戦ヲ援クルノミナラズ更ニ仏国政府ヲ土耳
格政府ヨリ離間セムト欲シ仏国ハ土耳格帝国ニ
対シテ陽ハニ好意ヲ表スルノ状ヲ粧フト雖ド

モ其ノ実ハ専ラ之ヲ削弱スルノ計ヲ事トセリ
トナシ加フルニ土都駐劄ノ英国大使ポンソビー
ハ其ノ仏国ヲ憎悪スルコトパルメルストンヨリモ大
甚シク土帝ノ諸大臣ハ其ノ浸言ヲ信シテ近時
仏人ノ陸續土領内ニ来住スルハ是レ仏国政府
カ土廷ニ対シテ禍心ヲ包蔵スルノ致ス所ナリトナ
シ土都駐劄ノ仏国大使提督ルリーサンニ対シテ
屢シ之ヲ難詰シルリーサンハ百方其ノ然ラザル
ヲ辯スルモ遂ニ其ノ疑ヲ釋クコト能ハス是
ヨリ先キ埃及ノパシヤ「メヘメツタリー」ハ土帝
ニ叛キテシリーヲ征略シ遂ニ之ヲ其ノ有トナ
セシカ彼レハ未タ之ヲ以テ足レリトナサスシテ
更ニ之ヲ其ノ主權ノ封領トナサムコトヲ要

求シ而シテ土帝ハ則チ之ニ反シテ時機ヲ窺ヒ
其ノ封土ヲ奪還セムコトヲ計レリ是ニ於テ英
国大使ハ仏国政府ヲ以テメヘメツタリーニ好意
ヲ表セリト稱シ次ヒテ土帝ヲ援ケテ其ノ志ヲ
為サシムルガ陰カニリヴン地方ノ人民ヲ煽動
シテメヘメツタリーニ叛カシメ英国政府ハ土帝
ノ保護者ヲ以テ自ラ任シ土都ニ於ケル英国ノ
信用ハ日ヲ逐フテ増進スルノ趨キアリ既ニシテ
千八百三十五年ノ終末ニ至リ英国政府ハ土廷
ガアンドリノープルノ條約ノ為メニ今尚ホ露国ノ
要求ニ苦ヲラルヽヲ救ハムト欲シデエルハン卿
ヲ特使トシテ露土ノ二国ニ送リ以テ二国ノ間
ヲ調停セムコトヲ計リタルニ二国ハ其ノ調

停ヲ容レテ翌千八百三十六年三月露帝ハ土
帝ヨリ払フベキ償金ノ一部ヲ免除シ若シ其ノ
残額ノ払渡ヲ了スルトキハ其ノ軍ノ内ニ洲
リストリーヲ占領セル露兵ヲ退リヘキヲ約シ
タリ
露国政府カ英国ニ對シテ此ノ如ク好意ヲ表シ
タルハ頗ル怪シムヘキニ似タリト雖ドモ是レ亦其
ノ故ナクムハアラズ蓋シ英露ノ二国ハ当時亜
細亜ノ方面ニ於テ其ノ勢力ノ消長ヲ争ヘ
リト雖ドモ欧洲ニ於テハ二国ノ間ニ姑ク釁隙
ヲ啓クコトナク相俱ニカヲ併テ其ノ視テ共同
ノ敵ト為トナセル者ニ當ラムト欲シタル者ニシ
テ嘗時露国モ亦英国ト均シクメヘメツタリー

ガ仏國ノ援ヲ得テ其ノ野心ヲ逞クセムコトヲ
恐レタルナリ
唯ダニ之レノミナラス上来屢々記述シ、ガ如
ク露帝尼哥拉士一世ハ常ニ仏王ルイー、フイリップ
ヲ以テ其ノ雖言敵トナシ之ヲ凌辱シ之ヲ窘蹙
シテ毫モ假借スル所ナリ一方ニハ仏國政府ニ向
フテ嘗テ肇破烈翁一世ガヴルソヴイー大公國
ヨリ借入レタル負債ノ償還ヲ要求スルト同時
ニ他方ニハ波蘭土ハ既ニ其ノ自治ヲ失ヘルヲ以テ
外國官吏ノ駐在ヲ要セストナシヴルソヴイー在
勤ノ仏國領事ニ迫リテ本國ニ退去セシメ
(千八百三十五年十二月)大ニ露都駐劄ノ仏國
大使ヲ冷遇シ又巴里駐劄ノ露國大使ポゾー、
デ、ボルゴーガ仏國ニ親ムコト甚シキニ過ギ
タリトナシテ之ヲ倫敦ニ轉任セシメタリ是故
ニメテルニッヒノ政策ハ專ラ英仏ノ二國ヲ離
間スルニ存シ而シテ露帝ハ則チ主トシテ好ヲ
英國ニ結ヒ以テ英仏ノ分離ヲシテ益々劇甚
ナラシメムト欲シタル者ニシテ露國カ英土
ノ調停ヲ容レテ土耳格ノ為メニ大ニ讓歩
スルヤ所アリシモ而決シテ異ムニ足ラス且ツ英土
ハ之ト同時ニ露ニ對シテ商業、関スル或ル種ノ
利害ヲ得ムコトヲ請求セリ露ハ又容易ニ
其ノ請求ニ應シ而シテ英國モ亦敢テ露國ノ
好意ヲ空クセス當時露國ガ希臘ニ於
テ其ノ勢力ヲ專有スルニ放任シ敢テ之ヲ控

制スルコトアラザリキ

其四　チヨール内閣及ヒ墺國大公主ノ結婚

右ノ如ク英国政府ハ暗々ノ間ニ只管ラ仏國ノ政策ヲ妨害セシガ為メルイ、フイリプハ益ニ心ヲ墺國ニ似ケ殊ニ千八百三十六年二月内閣首相ブログリー公ガ責ヲ議院ニ得テ其ノ職ヲ退キ年少政治家チヨール代リテ首相ニ任シタルノチ王ハ内閣ノ掣肘ヲ免レテ專ラ墺國政府ノ懷心ヲ收メムコトヲカムんニ至レリ且ツ新内閣ノ首相チヨールハ其ノ主義革命ニ傾ケリト雖ドモ其ノ人物ハメテルニツヒガ之ヲ辞シテ云ヘルガ如ク実務的革命家ニシテ能ク國政ヲ行フノ必要ヲ解シ場合ニ由リテハ其ノ政策ノ為メニ其ノ肯義ヲ捨ツルヲ意トセス故ニメテルニツヒハチヨールヲ以テブログリー公ノ如キ理論的憲治派ニ比シテ頗ル異ナリ者ナリトナセリ且ツチヨールハ自ラ政務ノ全權ヲ總攬シテ其ノ責任ノ衝ニ當リ敢テ之ヲ人ニ分ツコトヲ欲セスト雖ドモ彼レハ當時國王ルイ、フイリップト其ノ政見ヲ同クセルヲ以テ王ガ其ノ外交ニ干渉スルヲ厭フコトブログリー公ノ如ク太甚シキニ至ラズ彼レハ夙トニタレーランニ師事シ其ノ啓沃スルヲ以トナリテ墺國ト同盟スルノ利ナルヲ主張セリト雖ドモ是レ其ノ愛國ノ真情ヨリ出デタル者ニシテ王ノ如ク一己ノ利益ヲ計ルノ類皆ヨ

リ出デタルニアラズ彼レハ其ノ才力能クメ
テルニツヒヲ軍弄シ以テ自国ニ利スルコトヲ得
ヘシト思料セリ彼レノ人トナリハ稍ヽ英相パル
メルストンニ類シ其ノ愛国心ヲ標準トシテ百
事ヲ憑断セムト欲スルハパルメルストンニ異ナルコ
トナク其ノ好ミテ陰謀ヲ事トシ詐術ヲ弄スル
モ亦大ニ之ト相似タル所アリ然レドモ彼レハ
此ノ時ニ於テハ尚ホ甚ダ経験ニ乏シク加フルニ
外交家ニ必要ナル冷血ノ資ヲ欠ケルヲ以テ
到底メテルニツヒノ如キ巧慧ナル人物ト倶ニ其
ノ力ヲ角スルニ足ラス故ニメテルニツヒヲ軍弄
セムト欲シテ却テ自ラ其ノ軍弄スル所トナ
ルニ至レリ

チヱールモ亦ルイ、フイリップト均シク オルレアン公
ノ為メニ墺国ノ大公主マリー、テレーズヲ娶ラムト
欲シ其ノ入閣ノ當初ヨリ百方手段ヲ竭クシ
テ墺国ノ権心ヲ収メムコトヲ計レリ故ニ當
時北欧ノ三国ガ千八百十五年ノ維納條約ニ違
ヒテ恣マヽニクラコヴイ共和国ノ独立ヲ蹂躙スル
ノ挙動ヲ事トスルモ仏国政府ハ墺国ヲ憚カリ
テ其ノ為ス所ヲ傍観シ敢テ其ノ罪ヲ問フ
コトアラザリキ其ノ事タル他ナシ露墺普三
国ノ二帝一王ハ其ノ嘗テプリツツニ會シテ快
定セシ所ニ本キクラコヴイーニ潜匿セル諸国ノ乱
民ヲ駆逐スルヲ名トシ千八百三十六年二月十
七日恣マヽニ兵ヲ其ノ市内ニ進メ潜匿者ヲ捕

ヘテ之ヲ放逐シ其ノ市ニ備ヘタル民兵ヲ解散
シ其ノ自由ノ制度ヲ破壊シ三國ノ意思ニ從
フテ其ノ元老院及行政官ノ組織ヲ變更シ而
シテ市内秩序既ニ舊ニ復シタル後チニ至リ
テモ墺國ノ兵ハ猶ホ之ヲ去ラスシテ茫茅遂ニ
千八百四十一年ニ至レルコト是ナリ
當時仏國ノ輿論ハルイ、フイリップヲシテ兵カヲ
用ヒテクラコヴイーノ為メニ其ノ讐ヲ報セシメム
コトヲ希望シタルニアラズ然レドモ神聖同
盟ガ此ノ如クシテ再ヒ其ノ氣燄ヲ高メムトスル
ヲ抑フルガ為メ佛國政府ハ宜シク其ノ干渉ヲ
施コスニ便宜ナル他ノ方面ニ於テ立憲青義ヲ
扶立スルノ運動ヲ為サルベカラズト主張シ而

シテ當時西班牙ノ形勢ハ実ニ仏國政府ニ供フルニ神
聖同盟ニ對抗シテ立憲主義ヲ扶立スベキ景好
ノ機會ヲ以テセリ是ヨリ先キドン、カルロー ノ軍兵
ハ既ニカスチール ノ中部ニ侵入シマドリッド政府ハ兵カ
軍資ニ欠乏シテ之ヲ防禦スル所以ヲ知ラス英國
政府深ク之ヲ憂慮シ前キニ仏國ノ干渉ヲ峻拒シ
タルニ反シテ今ヤ却テ仏國政府ニ向ヒテ兵ヲ西班
牙ニ出ダサムコトヲ請求セリ憶フニ當時英國政
府ハ始メヨリ仏國政府ノ真ノ請求ニ應セザルヲ
察シテ故ラニ之ヲ請求シ仍テ其ノ拒絶ヲ名トシ
テマドリッドニ於ケル仏國ノ信用毀タムコトヲ計
リタルナラム夫レ然リ當時ルイ、フイリップハ專
ラ墺國ノ権心ヲ獲ムコトヲ求メ敢テ兵ヲ

西班牙ニ出ダシテ大陸諸國ト事端ヲ啟クコトヲ欲セズ而シテ首相チヤールモ亦往キニブログリー内閣ニ於テ西班牙出兵ノ議ニ左袒シタルニ係ハラズ今ヤ前説ヲ翻ヘシテ英國ニ親善ナルメンチザバールノ内閣ヲ援助スルヲ欲セストナシ遂ニ斷然英國ノ提議ヲ拒斥シタリ(千八百三十六年三月十八日)既ニシテマドリッド駐劄ノ佛國大使レーヌヴールノ教唆ニ成レル陰謀ノ為メニメンチザバールハ内閣ヨリ黜ケラレテイスチュリッツ代リテ内閣首相ニ任シ而シテ之ト同時ニ佛國ハマドリッドニ於テ稍其ノ勢力ヲ回復シルイーフイリッツプハ西班牙ノ為メニ其ノ戰亂ノ局ヲ結バムト欲シ幼年ノ女王イザベールヲドンカルローノ長子ニ娶ハスノ議ヲ提出シタリパルメルストンハ大ニ佛國政府ノ為スヿヲ憤ホリ時機ヲ視テ必ズ其ノ怨ヲ報セムコトヲ計レリト雖ドモ仏國君臣ハ絶エテ之ヲ意ニ介スルコトナリ只管ラ其ノ畫策ノ宜シキヲ得タルヲ喜ビ墺國政府ガ久シカラスシテ必ス其ノ好意ニ酬フヘキヲ期待セリ

然レトモメテルニッヒハ佛國ノ為スヿヲ以テ猶ホ未ダ足レリトセズ更ニ仏國政府ヲシテ其ノ數年前ヨリ占領セル アンコーヌ城ノ守兵ヲ撤セシメムコトヲ請ヒシニチヤールハ敢テ其ノ請ヲ拒ムコトナク若シ墺國政府ニシテ仏國ノ希望ヲ容レ(テ)ナルレアン公トマリー・テレーズ

大公主トノ結婚ヲ諾セバ仏國モ亦アンコースノ
守兵ヲ撤スルヲ諾スルノ意アルコトヲ諷示セ
リ然レドモ是レ唯タ一時ノ権謀ニ過キスシテ
當時チヨールハ信実ニ其ノ約ヲ履行スハノ
意アリテ此言ヲ為シタルニアラズ而シテメテル
ニツヒモ亦能ク其ノ然ルヲ察シ仏國政府ヨリ公
然結婚ノ請求ヲナスニ至ルマテ故ラニ知ラザル為
ニシテ敢テ之ニ言及スルコトアラザリキ
之ヲ久クシテチヨールハ終ニ堪フルコト能ハズシテ
急ニ結婚ノ議ヲ決セムト欲シ懐玉政府ノ
決心ヲ促スハオルレアン公自ラ維納ニ赴キテ公
然結婚ヲ求ムルニ若カスト思料シ公ヲシテ
其ノ弟ヌムール公ト倶ニ日耳曼ニ赴キテ先ツ

伯林ノ宮廷ヲ訪問シ轉シテ墺ニ維納ニ至
リテ自ラ結婚ヲ清求セシムコトヲ王ニ奏
請シテ其ノ許可ヲ得タリ蓋シ二王子カ先ツ
伯林ノ宮廷ヲ訪フハ懐國ヲシテ普佛二國ノ間
ニ親密ナル交誼ヲ結バムコトヲ恐レシムルノ計
ニ出デタル者ナリ既ニシテ二王子ハ伯林ニ到
リテ普王ノ宮廷ヨリ優渥ナル禮遇ヲ受ケ轉
シテ維納及スホーンブルンニ赴キ亦タ墺廷ノ
歓待スル厚トナレリオルレアン公ハ墺廷ノ其ノ
身ヲ禹スル極テ優渥ナルヲ視テ大ニ其ノ意ヲ
安ムシシヤルヽ大ニ會見シテ其ノ女ト婚ヲ結
ハムコトヲ求メタルニ大ニハ回ヨリ其ノ結婚ヲ
歓セサルニアラザルモ之ヲ行フニハ須ク皇帝

ノ許容ヲ獲サルヘカラズ而シテ皇帝ハ居常メ
テルニヲヒノ意見ニ由リテ百事ヲ裁決スル者ニシテ
メテルニヲヒハ始メヨリ此ノ結婚ヲ喜ハザルハ其ノ
故ニアリ〻ハ之ニ由リテ普王及露帝ノ不満ヲ招
カムコトヲ恐レニハ仏國ノ現王政ヲ以テ其ノ基
礎薄固ナラストナシ三ハ之レニ由リテ平生已レト相
善カラザル シヤルル大公ノ勢力ヲ加フルコトヲ欲セザ
ルコト即チ是レナリ故ニ帝ハメテルニヲヒト怪諺ノ
後チ断シテ オルレアル公ノ請求ヲ拒絶セリ オルレアル
公ハ其ノ請求ヲ拒絶セラレテ内心頗ル不快ノ念ヲ
抱キタルモ務メテ冷静ヲ粧フテ敢テ之ヲ色
ニ顕ハスコトナリ故ニ墺廷ノ其ノ身ヲ遇スル
コト優渥ナルヲ謝シテ其ノ國ニ帰レリ若シ夫レ

チエールニ至リテハ其ノ計ノ遂ニ成ラサルガ為
メ中外ニ對シテ大ニ其ノ面目ヲ損シ憤懣ノ
情ニ堪ユルコト能ハザリキ
ルイ、フイリップハ稍〻之ト其ノ趣ヲ異ニシ既ニ此ノ
失敗ノ後チモ尚ホ未ダ結婚ノ望ヲ絶ツニ至ラズ新
タニ墺國政府ニ譲歩スル所アリテ以テ其ノ希
望ヲ達セムコトヲ期セリ是ノ時ニ方リ(千八百三
十六年六七月ノ交)墺太政府ハ瑞西ノ亡命者ガ
瑞西聯邦内ニ潜匿シテ専ラ諸西ノ帝王ニ対スル
ノ陰謀ヲ事トスルヲ憂ヒ苦リニ聯邦政府ニ迫
テ速カニ此等ノ亡命者ヲ放逐セシコトヲ要
求セリ然ルニ佛國政府ハ前キニブログリー内
閣ノ時ニ方リカメテ瑞西ニ於ケル革命党ノ

運動ヲ防制スルト同時ニ又其ノ非干渉肯義
ニ本キテ同國ノ独立ヲ擁護セリト雖トモ今ヤ
專ラ墺国ノ歓心ヲ収ムルニ急ニシテ其ノ平生ノ
主張ニ戻リ瑞西ヲ脅迫シテ墺心ノ希望ニ副ム
コトヲ計レリ是レヨリ先キ瑞西ハ夙トニ其ノ
日耳曼方面ノ交通ヲ杜絶セラレテ纔カニ仏國
ト交通スルニ過キザリシニ仏國内閣ハ更ニ之ニ
告クルニ今差シテ亡命者ニ對シテ厳重ノ處分ヲ
施スコトヲ肯ムセズムバ亦其ノ佛國トノ交通ヲ遮
断スベキヲ以テシタリ瑞西國民ハ佛國政府
ノ通牒ニ接シテ憤懣禁スル能ハズト雖ドモ
其ノ勢ヒ固ヨリ仏國ニ抗スルニ足ラサルヲ以テ
ベルン又ノ聯邦議會ハ同年八月新タニ一ノ法
律ヲ制定シテ爾来外國政府ヨリ指定スル
ニ命ニ者ヲ國境外ニ放逐スルコトヽナセ
リ
夫レ斯ノ如クルイー、フイリップハ百方手段ヲ
竭クシテ墺国政府ノ歓心ヲ収メムト欲スル
モ墺国ハ曾テ其ノ好意ニ酬ユルコトヲ為サ
ズメテルニツヒハ仏國ヲシテ オルレアンムトマリ
テレーズ大ヲ主トノ結婚ヲ断念セシメムト
欲シ其ノ間ヲ以テ大ヲ主ヲナープル王ニ娶ハス
ノ談話ヲ開始セリ將タルイー、フイリップノ
主張ニ係ル西班牙ノ女王イザベールトトシカル
ロノ長子トノ結婚ニ就キテモメテルニツヒハ
亦タ仏國ヲシテ其ノ望ヲ遂ケシムルヲ肯

ムセザリキ蓋シ此事ニ就キテ仏國政府ガイ
ザベールヲドン、カルロールノ長子ニ娶ハサムト欲ス
ルノ趣旨ハドン、カルローヲシテ之ニ由リテ自ラ
王位ニ即クノ念ヲ断チテ イザベールノ位ト
其ノ立憲制ノ正當ナルトヲ兼認セシムルニ
在リ然ルニ メテルニッヒハ仏國ノコノ提議ニ對
シテ故ラニ久シク其ノ回答ヲ遷延シタル後チ
終ニ亜墨三國ノ名ヲ以テドン、カルローノ長子ハ
宜シク其ノ王位ニ即クノ権利ヲ抛棄スルコト
ナクシテ イザベールヲ娶ラザルベカラズト宣
言セリ
チエールハ此ノ報ニ接シテ終ニ全ク其ノ望ヲ
失ヒ久シク壊心ノ飛弄スル所トナリテ笑ヲ

憲法ノ復立セムコトヲ要求シ奉シテ英国

欧洲列国ニ招クヲ欲セズ仏國ハ英国若クハ墨西
ノ意向奈何ニ係ハラズ断然イザベールノ政府ヲ扶
立シ已ムナクムバ兵カヲ用ユルモ決シテ退避スベカ
ラズト主張セリ此ノ時ニ方リドン、カルローノ党些
ハ西班牙ノ北部ヲ占領シ其ノ首領ノ一人コメズハ
兵ヲ率イテ既ニアンダルジーニ侵入シ之ニ加フルニ
急進党ハ内乱ノ久シク鎮定ニ帰セザルハ主トシ
テ現内閣ガ保守政策ヲ事トスルノ致ス所ナリト
稱シ所在ニ蜂起シテ乱ヲ起シ以テ千八百十二年ノ
政府ハ密カニ人ヲ西班牙ニ送リテ急進党ノ運動ヲ
幇助シ仏國ノ保護セル イスチエリッツ内閣ハ今ヤ
兩敵ノ間ニ在リテ其ノ危急殆ント支フベカラザル
ニ至レリ是ニ於テ チエールハ西班牙政府ヲシテ能ク

其ノ危急ヲ免ガルヽニ足ルベキ兵力ヲ得セシメムト欲シ而シテ新タニ兵ヲ西班牙ニ送ルニハ英國ニ快議シテ其ノ兼諾ヲ得サルベカラザルヲ以テ其ノ煩累ヲ避クルカ為メ去年以来西班牙政府ノ用ニ供シタル義勇兵ノ補員ヲ名トシテ其ノ兵員ヲ二倍セント欲シ千八百三十六年七八月ノ交ニ萬二千一萬五千ノ兵員ヲビレネー山林麓ニ集中シ將軍ビエジョーヲ亜非利加ヨリ招キテ其ノ兵ノ司令官タラシメムコトヲ奏請セリ然レトモルイー、フイリップハ始メヨリ西班牙ノ事ニ干渉スルヲ欲セザルヲ以テ肯テ此ノ計ヲ用ユルノ意ナリ而シテチエールモ亦固リ自説ヲ主張シテ其ノ主命ヲ奉セザルヲ以テ王ハ機會ノ到ルヲ待チテ

其ノ内閣首相ノ職ヲ罷メムコトヲ計レリ既ニシテ八月十二日ノ夜ニ西班牙ノ軍兵叛乱ヲ起シテ マリー、クリスチヤヌノ居住セルグランジヤーノ宮殿ニ闖入シ千八百十二年ノ憲法ヲ復立シテ新タニ國會ヲ招集シ急激党ノ首領カラトラヴーハイスチエリツツニ代リテ内閣首相トナリ而シテマドリツド駐劄ノ英國大使ハ其ノ為ス所ヲ傍観シテ敢テ之ヲ咎ムルコトアラザリキ是ニ於テルイー、フイリップハ更ニ西班牙ニ干渉ヲ施コスヲ排斥スルノ新辞柄ヲ案出シテ佛國ハ西班牙ノ急激党ヲ援クルノ理ナシト稱シチエールハ之ニ答ヘテ仏軍西班牙ニ在ルトキハ能ク其ノ急激党ノ勢力ヲ抑制スベシトナシ速カニドンカルローノ党與ヲ

勦滅シ英国ヲシテ独リ其ノ勢力ヲ恣マニスルヲ得セシメザルハ是レ則チ西班牙ノ急激党ヲシテ温和主義ニ傾カシムル所以ナリトナシ反覆之ヲ力争セリト雖ドモ王ハ曾テ其ノ説ヲ容納セザルノミナラズ更ニピレネー山林麓ニ集中セル軍兵ヲ解散セシコトヲ主張セリ是ニ至リテチヤールハ終ニ其ノ意見ノ行ハレサルヲ察シ同僚ト倶ニ内閣ヲ退カムトヲ請ヒ千八百三十六年九月六日モレー伯ハ之ニ代リテ首相兼外務大臣ニ任シタリ

其五　モレー、メテルニッヒ及ビメルボルン

モレー内閣ハ在職二年半ニシテ其ノ政策ハ叫イー、フイリップノ持論タル温和的保守肯義ニ循由シ外ニ對シテハ専ラ大陸ノ諸大国就中墺普ノ二国ト協同スルヲ旨トセリ故ニ新首相ハ其ノ外交ノ方針ニ就キテ常ニ其ノ主叫イー、フイリプト意見ヲ同シクシメテルニッヒトルイー、フイリップトノ間ノ交情益ヽ親密ヲ加ヘ而シテモレーモ亦常ニ墺国ノ意ヲ忤フナカラムコトヲ力ムルノ故ニ中リテ大ニメテルニッヒノ喜フ所トナレリ

新内閣ハ其ノ就職ノ始メヨリ墺国政府ニ好意ヲ表セムコトヲ計レリ是ノ時ニ方リ墺国ノ兵ハ クラコヴイー共和国ヲ片頭ニ在国ハ今尚ホ其ノ憲法ノ施行ヲ中止セリト雖ドモモレーハ チヤールト均シク墺国政府ニ向ヒテ敢

テ其ノ暴行ヲ責ムルヲナリ瑞西ニ對シテモ亦
都ベテ チヨールノ為セル所ヲ継紹シテ怒スルコ
トアラザリキ是ヨリ先キ仏國政府ハ間諜
ヲ瑞西ニ放チテ窃ニ騒乱ヲ煽動セシメタル
ニ事露レテ其ノ中ノ人コンセイユナル者ベルンヌ
ニ於テ瑞西官吏ノ捕フル所トナリ瑞西政府ハ大
ニ佛國ノ為ス所ヲ憤ホリテ其ノ損害賠償ヲ
要求セリ然レドモモレーハメテルニヒノ勸告ニ從
ヒ固ク執リテ瑞西政府ノ要求ヲ拒ミ更ニ其ノ
仏國トノ交通ヲ遮斷スベキヲ聲言シ千
八百三十六年九十月ノ交ニジラー山麓ニ許多
ノ軍兵ヲ集中シテ大ニ之ヲ威嚇セリ是ニ於テ
瑞西國民ガ仏國政府ニ對スル憤懣ハ今ヤ

其ノ絶頂ニ達シ而シテ ルスタード ロノ死後自
ラ ナポレオン家ノ相續人トナレル年少ノルイ、
ボナパルトハ此ノ機ニ乘シテ瑞西在ル亡命者ヲ
糾合シ ストラスブール ノ守備隊ヲ煽動シテ乱ヲ為
サシメムト欲シタルモ事破レテ亜米利加ニ出
奔シ之ヲ久クシテ瑞西政府ハ勢ヒ終ニ抗スル
コト能ハスシテ其ノ要求ヲ撤回シ甘ムシテ佛
憤ニ國ノ監視ニ服スルニ至レリ將タ西班牙事
件ニ就キテモモレーハ亦メテルニヒノ意ヲ迎ヘ
テ マリークリスチヤンヌニ告クルニ兵ヲ出シテ其ノ
急ヲ救フノ意ナキヲ以テシ且ツ窃カニメテルニヒ
ニ告クルニ若シ ドン、カルローニシテ今後更ニマリー、
クリスチヤンヌノ兵ト戦フテ顕著ナル勝利ヲ獲

ルコトアラバ之ヲ西班牙王ト認ムベキヲ以テシタリ
佛國政府ハ唯ダニ斯ノ如クニシテ懷國政府ノ
權心ヲ收ムルコトヲカムルノミナラズ更ニ普國
政府ト俱ニ親交ヲ修メムト欲シ而シテ普王
フレデリック、ギーヨームモ亦平和ノ間ニ其ノ晩年ヲ
終ヘムト欲シ佛國ニ對シテ大ニ好意ヲ表スルノ狀
アリ且ツルイー、フイリップハ長子オルレアン公ノ為
メニ懷國ノ皇女ヲ娶ルコト能ハザリシヨリ其
普王トノ親交ヲ利用シ普王ノ王族中ヨリ一女
子ヲ獲テ之ニ娶ハシムト欲シ普王亦其ノ意
ヲ領シテ其ノ間ニ斡旋シオルレアン公ハ遂ニ十
八百三十七年五月三十日ヲ以テ普王ノ近親
メクレンベルグ、スヘウエリン大公ノ妹ト婚スルコトヲ

得タリ蓋シ普王ハ此ノ結婚ニ由リテ一層普
仏ノ間ノ交情ヲ厚クシ仍テ其ノ日耳曼聯
邦ニ於ケル勢力ヲ振張シテ懷國ヲ凌駕スル
ニ至ラムコトヲ期シタリシナリ
モレー内閣ハ既ニ懷普二國ト相結托スルニ至
リタルヲ以テ英國ニ對シテ大ニ其ノ意ヲ強ク
シ西班牙ニ於テハ隈カニカラトラヴー、内閣ヲ
傾覆スルノ計ヲ施コンアルゼリーニ於テハ
意ヲ決シテ進取ノ事トシ千八百三十六年
十月コンスタンチーヌニ於テ仏國一度ヒ敗ヲ取リ
翌千八百三十七年五月メナノ條約ニ由リテ
アブデルカデーヲシテ大ニ讓歩ヲ為サシメタル
後チ同年十月大舉シテ再ビコンスタンチーヌヲ

艦ヒ同市ニ屬シタル州郡ヲ併セテ之ヲ佛
國ノ有ニ帰セリ當時土耳格政府ハ千二百
經由シテ其ノ援兵ヲコンスタンニ送ラムト欲シタ
ルモ佛國ノ艦隊ダルダネルノ海峡ヲ梗塞
シテ其ノ通行ヲ許サス而シテ之ト同時ニ仏
國政府ハ敢テ其ノ埃及ニ於ケル勢力ヲ失墜
スルコトナカラメヘメツタリーヲ扶ケテ埃及及ビ其ノ
附近ノ諸州ヲ奪ノ封領ト為サムコトヲ
土耳格帝ニ迫ラシメタリ
右ノ如クナルヲ以テ仏國ノ政策ハ痛リ英國
政府ノ感情ヲ害シ而シテパルメルストンモ亦手
ヲ拱シテ仏國政府ノ為ス所ヲ傍観スルヲ欲
セス、西班牙ニ於テハ英国ハ其ノ力ノ及フ所ヲ唱

クシテカラトラヴーノ内閣ヲ扶立シ マリー、クリス
チャンヌヲシテ其ノ戰ニ勝利ヲ獲セシメムト
欲シテ之ニ各種ノ援助ヲ與ヘ又大ニ其ノ國
會ヲ刺戟シ千八百三十七年七月ヲ以テ新
タニ一ノ憲法ヲ制定セシメタリ而シテ此ノ憲
法タル父ラスシモ千八百十二ノ年ノ憲法ノ如ク
專ラ民主肯羮ニ循擾シタル者ニアラスト雖
ドモ亦仏國大使ラフヲールモーブールノ唱道セルカ如
キ保守肯羮ト相交ル者ニアラズ既ニシテ
ギーオーム三世千八百三十七年六月二十四日ヲ
以テ世ヲ逝リ王女ヴイクトリヤ代リテ王位ニ即
キタリシガ英國ノ政策ハモ之レカ為メニ変
更ヲ来タスコトナカラメルボルン卿ハ厚ク女王ノ

信任ヲ得テ内閣首相ノ職ニ留マリ而シテパル
メルストン卿ハ陽ニメルボルス卿ヲ戴キテ常ニ政府
ノ全権ヲ掌握シ西班牙ニ對シテ益ニ其ノ勢
力ヲ扶植セムコトヲ計リ而シテ是レト同時ニ
佛國ハ同國ニ於テ日ニ其ノ信用ヲ失ヒマリー、
クリスチヤンスハ終ニ英國政府ノ庇護ヲ変ケ
ケル將軍エスパルテロー ヲ挙テ委スルニ文武ノ
大権ヲ以テセリ是ヨリ以降西班牙ノ憲法党ハ
其ノ軍氣大ニ振ヒ侵来北政ノ三大國ガ之ヲ
経由シテドン、カルロー ニ軍器糧餉ヲ供給シタル
ビスケー海岸ハ英國ノ艦隊ヲ以テ厳ニ之ヲ
警備シ次ヒテ千八百三十八年中ニドン、カルロー ノ
兵ハ各地ノ戰ニ於テ屢ヽ敗衂ヲ招キ兵氣

全ク沮喪シテ軍紀大ニ乱レマリー、クリスチヤンス ノ
軍兵ガ最後ノ大勝利ヲ獲ルハ將ニ近キニアル
ラムト英國政府ハ之ニ由テ益ヽ其ノ勢力ヲ
マドリッドニ振ヒパルメルストンハエスパルテロー ノ力ニ
由テ永ク西班牙ヲ其ノ保護ノ下ニ置クコト
ヲ得ベシト思料シタリ
英國政府ハ唯ダニイベリヤ半島ニ於テ仏國
ノ政策ニ反對スルノミナラズ世界中到処ニ於
テ之ニ妨害ヲ加ヘムコトヲ計レリ故ニ千八百
三十八年ノ始メ仏國政府ガ墨其士哥及ビ
亜爾善丁ノ二國ニ於テ生命財産ノ侵害ヲ
変ケタル自國人民ノ為メニ其ノ損害ノ賠償
ヲ両國政府ニ要求スルニ方リ英國政府ハ右ノ

兩國ヲ敷衍シテ佛國トノ談判ヲ困難ナラシメ
仏國政府ハ之レカ為メ真ノ海軍ノ主力ヲ兩國ノ海
岸ニ集メテ他ニ之ヲ用ユル能ハザルコト殆ムト
一年ノ久シキニ亘レリ將タ政海ノ列國ニ對シテ
ハ英國政府ハ故ラニ仏国トノ交情極メテ親密
ナルヲ聲言シ千八百三十八年六月特派大使ト
シテ來リテヴイクトリア女王ノ戴冠式ニ列シタ
ル大將ソールニ對シ大ニ禮遇ヲ加ヘリト雖ドモ
其ノ後ヲ數月ヲ出テズシテモレー内閣ノ要
求ニ由リテ瑞西ヨリ追放セラレタルルイ、ボナ
パルトガ來リテ倫敦ニ居住シ佛國内ニ在ル其
ノ党類ト遥カニ聲息ヲ通シテ仏國ノ現王政
ヲ覆ヘスノ陰謀ヲ企ツルモ英國政府ハ曾

テ之ヲ制止スルコトアラサリキ若シ夫レ東政
ノ方面ニ於テハ英國政府ハ仏國ノ政策ヲ妨
害スルコト最モ甚シク土都駐劄ノ英国大使
ポンソンビーハ土廷ヲ慫慂シ仏國ニ向フテコンスタ
ンチヌヲ占領セシヲ難シ且ツアルゼリーニ於ケル
土帝ノ主權ヲ兼認セムコトヲ要求セシメ而
シテ之レト同時ニ英国政府ハ勢タニ土廷ト通
商條約ヲ協定シテ從來土國内ニ於テ露西亞ノ
專有セル所ト同一ノ利益ヲ収得シタルノミナラ
ス埃及ノ総督メヘメットアリーハ此条約ノ締結後
終始英國ノ勧制スル所トナリテ大ニ其ノ勢力
ヲ失ヒパルメルストンハメヘメットアリーニ向フテ彼レ
若シ土帝ニ背キテ兵ヲ起ストキハ英国ハ土帝ヲ

援ケテ之ト戰ヲ開クベキヲ告ケ而シテ其間英心
ハ別テシノ片頗ニ着手シ更ニ時樣ヲ窺フテ又ハ
ノ地峡ヲ略取スルノ計畫ヲナセリ

其六　白耳義問題及アンコース問題

以上述フルカ如クナルヲ以テ英佛間ノ同盟條約ハ
未ダ公然廢棄スルニ至ラズト雖トモ要スルニ是
レ唯ダ紙上ノ空文ニ過キズシテ仏國政府ハモ
英國ノ援助ニ待ツ所アルヲ得ズ加フルニ露國
ハ今猶ホ仏國ニ對シテ其ノ旧怨ヲ解クコト
ヲ欲セズ輒モスレハ英國ト結托シテ佛國ノ
勢力ヲ抑ヱムト欲シ而シテモレー内閣ハ此ノ
二強國ト其ノ力ヲ角スルガ為メ懷柔ノ國ノ
援助ヲ得ムコトヲ朝シタルモ是レモ亦空

望ニ過キズシテ二國ハ仏國ニ對シテ屢ヽ過
當ノ要求ヲ提出シ以テ其ノ遂ニ恃ムニ足ラ
ザルヲ表彰シタリ
既ニ前章ニ記シタルガ如ク千八百三十三年
五月ホ日ノ條約ニ由リ荷蘭王ハ白耳義ヲ
對シテ攻撃ヲ加フルコトナカルヘキヲ約シ
タリ然レドモ王ハ之ニ由テ白耳義ノ独立
ト二十四箇條ノ條約ニ指定シタル同國ノ
經界トヲ兼認シタルニアラズ王ハ五年以
來種々ノ辯柄ヲ設ケテ其ノ談判ノ決定ヲ
延期シ他日改治上ニ何等カノ変動ノ発生
スルヲ待チテ其ノ復讐ヲ計ラムト欲スル
者ノ如クナリシニ千八百三十八年三月ニ至リ

王ハ突如トシテ二十四個條ノ條約ヲ兼認スル
ノ意アルコトヲ宣言セリ而シテ王カ此ノ時
ニ至リテ急ニ其ノ抗議ヲ撤回セシハ蓋シ
從来王ニ向フテ固執セル ナカラムコトヲ慫慂
シタル普國政府カ今ヤ該問題ノ急ニ決定
ニ至ラムコトヲ希望シテ密カニ王ニ勸告ヲ加ヘタ
ルニ由ラスムバアラズ是ヨリ先キ普王ノ王室ハ
專ラ新教ヲ崇信シテ舊教ノ僧侶ヲ虐遇
セルカ為メ舊教ヲ奉スル萊因地方ノ人民
ハ之ヲ視テ大ニ憤激シ コローニユ、トレーヴ エキ
スラ、シヤツペール 等ニ於テハ之カ為メ頗ル不穏ノ
狀況ヲ呈シタルヲ以テ普國ノ君臣ハ同地方
ノ人民カ遂ニ普國ニ叛キテ舊教國タル白

耳義ニ合セムコトヲ計リ而シテ白耳義
モ亦普國政府カ荷蘭ヲ扶ケテ自國ヲ敵
視スルヲ憤ホリ此機ニ乘シテ普領ノ舊教
徒ヲ煽動スルニ至ラムコトヲ恐レ即チ其ノ歡
心ヲ收ムルカ為メ荷蘭王ニ諷諭シテ二十四個
條ノ條約ヲ容認セシメタルナリ然レドモ白
耳義ノ議會ハ此形勢ヲ視テ密カニ萊因
地方ノ革命ヲ挑発シテ之ヲ自國ニ併スルノ
野心ヲ包藏シ更ニ二十四個條ノ條約ヲ排斥
シテ之ヲ兼認スルコトナカラムト欲シ條約
ノ規定ニ從ヒ力山堡及ビリンブルグノ大部ヲ
荷蘭ニ與ヘラ同地方ニ居住スル白耳義人民
ヲ捨ツルノ不可ナルヲ主張シ且ツ荷蘭政府カ

久シク和議ヲ背ムセザリシガ為メ大ニ軍事費ヲ增加シテ其ノ事攻ニ備フルノ已ムヲ得ザルニ至レリト稱シ以テ其ノ荷蘭ニ払フベキ國債ノ金額ヲ減センコトヲ要求セリ而シテ当時白耳義政府ハ從来仏國ノ棄論ガ二十四個條ノ條約ニ極力攻擊ヲ加フルヲ視テ專ラ仏國ノ援ヲ得テ其ノ主張ヲ貫カムコトヲ期シ佛王ルイーフイリップ及ビ首相モレーモ亦國中ノ棄論ニ迫ラレテ之ニ其ノ援ヲ與ヘムト欲スルノ意ナキニアラザリキ

五大強國ハ千八百三十八年六月ヲ以テ再ビ倫敦會議ヲ開キタルニ同會ニ於テハ佛國ヲ除クノ外絶エテ白耳義ノ要求ヲ同護スル者ナク英國ハ專ラ仏國ノ勢カヲ牽制セムト欲シテ主トシテ千八百三十一年十一月ノ條約ヲ訂結スルニ韓旋セシヲ以テ今ニ及ヒテ固ヨリ之ヲ更改スルヲ欲セズ露帝ハ終始白耳義人ヲ疾視シレオポルド王ガ嘗テ千八百三十一年ノ乱ニ波蘭土ヨリ追放セラレタル士官ヲ招聘シテ之ニ重要ノ軍職ヲ授ケタルヲ外ノ善王ハ專ラ其ノ兼領州ヲ失ハムコトヲ恐レテ マヌーストリヒト及ヒカ山堡ヲ以テ白耳義ノ有ニ帰スルコトヲ欲セズ懷國モ亦普國ト協同シテ右ノ二州ヲ白耳曼聯邦ノ中ニ加ヘムコトヲ主張セリ是ニ至リテ佛國政府遂ニ四國ノ抗議ニ屈シテ其ノ主張ヲ撤回シ十二月十一日倫敦會議ハ

一ノ議定書ヲ作リテ其ノ閉會ヲ告ケリ而シ
テ其ノ議定書ハ白耳義ノ為メニ著シク其ノ
負債ノ額ノ削減セリト雖ドモ其ノ要求ニ係ル
カ山堡及ビリンブルグノ地ハ之ヲ和蘭王ノ有ニ帰
シテ日耳曼聯邦中ニ編入シ次ヒテ墨二千八百三十
九年一月ヲ以テ仏國政府ハ遂ニ右ノ議定書ヲ兼
認シ白耳義ノ議會ハ此事ニ就キテ激論數
週間ニ亘レル後チ同年四月十九日レオポール王ノ名ヲ
以テ亦遂ニ右ノ議定書ヲ兼認シタリ
白耳義ニ於ケル少イーライリップノ失敗ハ仏國人
心ニ至大ノ激動ヲ與ヘ現王朝ノ敵党ハ之ヲ以
テ其ノ國旗ニ汚辱ヲ與ヘリトナシテ痛ク之ヲ攻
撃セリ而シテ此時ニ於テ更ニコレコーヌノ守兵

撤退ノ事アリ此事タル其実極メテ穏当ノ
措置トシテ道理上一モ咎ムベキモノアラズト雖
ドモ反對党ノ之ヲ攻撃スルハ白耳義ノ失敗ヲ
攻撃スルヨリモ一層其ノ太甚シキヲ加ヘタリ
蓋シ仏國ノ輿論ハ其ノ國旗ノ伊太利ノ地ニ翻
ヘルヲ以テ墺國ノ專權ニ反抗シ神聖同盟ノ
勢力ヲ排斥スル所以ナリトナシ大ニアンコーヌノ占
領ヲ喜ビテ永ク之ヲ撤スルナカラムコトヲ
望ミタモ墺國及ビ羅馬法王ハ之ニ反シテ佛國
ヲシテ速カニ其ノ占領ヲ撤回セシメムト欲シ千
八百三十八年ノ秋メテルニッヒハ墺帝フランチナンド
一世ニ從フテミラノニ赴キ詳カニ伊太利ノ形
勢ヲ視察シテ法王ノ領内ヨリ墺國ノ軍兵ヲ

撤退スハモ毫モ自國ノ勢力ヲ損スルノ患ナキヲ悟リ同年十月突然仏國政府ニ向フテ其ノ兵ヲ悉ク河ノ以北ニ退去セシムルノ通牒ヲナセリ是ニ於テ仏國政府モ亦千八百三十二年四月ノ條約ニ循由シ同年十二月アンコーヌノ占領ヲ撤シテ其ノ守兵ヲ召還セリ然レドモモレーハ之ニ由リテ國ノ〻物議ヲ招カムコトヲ恐レ其ノ軍面ヲ粧フカ為メ法王ニ向ヒテ其ノ頗内ノ政治ニ多少ノ改革ヲ行フカ然ラズムバ佛國政府ニ感謝狀ヲ送ラムコトヲ要求セシモ法王グレコアール十六世ハ壊心政府ノ内意ヲ兼ケテ終ニ其ノ要求ニ應スルコトヲ肯ムセサリキ要スルニ仏國政府ハ其ノ懷抱ニ對シテ盡クシタル好意ニ就キテ一モ其ノ報酬ヲ受リルコトアラサリシナリ

既ニシテ千八百三十九年三月ニ至リモレー内閣ハ其ノ外交政策ノ宜シキヲ得サルガ為メ痛ク人望ヲ失フテ其ノ職ヲ退キ而シテルイーフイリップモ亦大ニ諸党派ノ信用ヲ失フテ二個月ノ久シキ新内閣ヲ組織スル能ハサリシガ千八百三十九年五月十二日巴里ニ於テ一揆ノ騒乱ノ起リシガ為メ大將ソールヲ首相トシテ稍〻信用アル内閣ヲ組織スルヲ得タリ而モ其ノ内閣ニハモレー内閣ヲ仆ホシタル議院内ノ諸名士ヲ網羅スルコト能ハサリシガ為メ早晩其ノ反對ヲ受クルノ恐レアリテ其ノ能ク久シキニ維持セムコトヲ望

ムベキニアラズ且ツ新内閣ハ其ノ就職ノ始メヨリ至困至難ノ事変ニ逢着シ去人ガ数年前ヨリ期待シタル東方ノ危機ハ遂ニ此時ヲ以テ爆発シ而シテ仏國ハ此ノ変難ニ際會シテ英國ヨリ積年セラレ北歐ノ三國ヨリ猜忌セラレテ孤立為スナキノ窮境ニ陥ヒリタリ